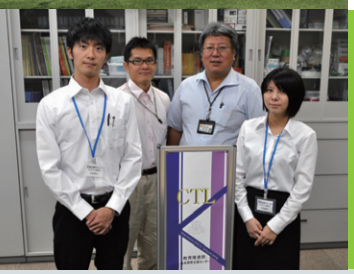

THINK × ACT
KANSAI UNIVERSITY

CTL Newsletter

Kansai University Center for Teaching and Learning

関西大学 教育開発支援センター
ニューズレター

December 2013
vol. 13

共に学ぶ者でありたい

教育推進部教授／教育開発支援副センター長　三浦 真琴

アクティブ・ラーニングとは行為・動作であり、あるいは状態・態度である。その動作や態度への到達、ハビトゥスとしての習得を願って、これを目標として設定することが可能となる。その目標を実現するために手法が編まれ、方略が組まれる。当然のことながら「手法」は「行為・動作」や「態度・状態」とは識別されるのだが、2012年の中教審答申は「アクティブ・ラーニング」を手法の総称として定義したものだから、心ある大学関係者は混乱し、困惑もしている。

アクティブ・ラーニングを標榜したGPを獲得し、その成果報告を求められるようになったCTLには講演会の依頼が増えた。しかしアクティブ・ラーニングを「手法」の用語・概念と認識しているためか、何かよいチップスはないか、ノウハウを是非教えてほしいというリクエストが事前に寄せられ、あるいは当日の講演に期待されることが多い。リクエストや期待には可能な限り応ずるようにはしているが、“How to teach”より“What (not) to teach”の方が肝要であると必ず伝えるようにしている。それはつまり学生をどのような学習者に育てたいのかということにつながることだからである。

先般の講演会では「ゼミはアクティブ・ラーニングに含まれるのでしょうか」との質問を受けた。19世紀のアメリカのカレッジで展開されていた復唱ばかりの授業や筆記学問に辟易していた大学教師にとって、ドイツの大学で始まったゼミナールは驚愕と羨望の対象であった。そこには瞳を活き活きと輝かせる学生、その学生と共に真理を探究する教師の姿があった。学生、教師がともに「学ぶ者（student）」として席を同じうするのがゼミナールである。即ち、ゼミとはアクティブ・ラーニングの場に他ならない。

そういえば世界最大の大学図書館ワイドナーの入り口辺りには「studentだけがこの図書館を利用できる」と書かれていたように記憶している。Student、つまり「学ぶ者」とはアラゴンの長い詩の一節を借りれば「誠実を胸に刻む者」のことである。学生をアクティブな学習者に導くためには、教師もまた学ぶ者でなければならない。少なくとも誠実を胸に刻んだ若かりし日のことを忘れてはなるまい。アクティブ・ラーニングを実現するために、わたくしたちは手法のマニュアルやチップスを獲得するよりまえにしなければならない大切なことがあるように思う。